

鶴見和子文庫未公開資料から

発見された生活綴方文集『私の家』

鶴飼 正樹

はじめに

鶴見和子の旧蔵書約四五〇〇冊、ならびに未公開の資料、草稿、フィールドノート、研究メモ、書簡などの資料約六〇〇〇点は、京都文教大学に寄贈され、同大学図書館の「鶴見和子文庫」として所蔵されている。人間学研究所では、「個人の思想形成と蔵書の研究——京都文教大学図書館所蔵の鶴見和子文庫を手がかりとして——」をテーマとして、二〇〇七年度より、鶴見和子文庫に関する共同研究をはじめた。二〇〇八年度からは、科学研究費補助金（基盤研究B・「『普通の人の哲学』と『知識人の思想』の葛藤をめぐる戦後思想史——鶴見和子文庫を開く』」も得て、未公開である資料、草稿、ノート類の整理と分類の作業が続いている。

ここで復刻・紹介するのは、その途上において発見された、生活綴方文集『私の家』である。

1. 生活を記録する会と『私の家』

二〇〇二年に日本図書センターより刊行された、『紡績女子工員生活記録集』（以下『記録集』）は、東亜紡織株式会社泊工場（三重県四日市市）のサークル「生活を記録する会」の生活綴方文集や資料を復刻した、貴重な出版物である。生活を記録する会は、一九五〇年代から現在まで、五〇年以上にわたって生活綴方「会」を書くことを継続してきた、日本でもまれな集団であり、その活動の記録が復刻され、

ひろく社会に公開・共有されるようになったことは、非常に大きな意義がある。

生活を記録する会の活動の出発点となったのは、一九五二（昭和二十七年）年六月に印刷・製本された、ガリ版刷り・ホッチキス製本の文集『私の家』（以下『私の家（ガリ版）』と表記）だった²⁾。工場に隣接して建てられた寮に暮らし、八時間・二交替制で働いていた女子工員たちが、自身の故郷の家や村、家族のことをつづった、この文集は、「大人の『山びこ学校』」として各方面で反響呼んだ。そして、同年九月十日には、活版刷りの『私の家』（以下、『私の家（活版）』と表記）が発行された。さらにのちには、『私の家（ガリ版）』から選ばれた五作品が、一九五四年十一月に河出書房から刊行された、木下順二・鶴見和子編『母の歴史』（河出新書）の第I部として、収録されている。

しかし、『記録集』に復刻されているのは『私の家（活版）』であり、『私の家（ガリ版）』は、復刻されていない。『記録集 第1巻 私の家・母の歴史』の解説を書いている辻智子によれば、その理由は「原本不在のため」¹⁾「辻、二〇〇二a・六」ということである。発行されたのは一五〇部程度だった「志賀、一九五二a・二二八」³⁾『私の家（ガリ版）』は、生活を記録する会のメンバーの手許にも、原本が残されていないということなのであろう。

この不在とされている「原本」、『私の家（ガリ版）』が、二〇〇七年十二月、鶴見和子文庫の資料整理中に発見された。生活を記録する会の出発点となった文集として価値があるだけでなく、戦後の民衆思想史・社会運動史の研究においても貴重な資料であると考へ、発見された『私の家（ガリ版）』の一部を、『人間学研究』の中で復刻することにした。

なお、紀要というメディアの制約上、復刻は『私の家（活版）』にない以下の頁のみに限定せざるをえなかった。表紙紙、「この文集ができるまで」〔一〜二頁〕、「労文山びこ学校とは？」〔六四頁〕。

ただしノンブルなし」、「あとがきにかえて」「最終頁。ノンブルなし」、裏表紙。全頁の復刻は、他日を期したい。

2. 鶴見和子と生活記録運動

鶴見和子の研究業績は多岐にわたるが、一九五〇年代から六〇年代にかけて、もっとも深くコミットしたのは、生活綴方・生活記録運動であった。

鶴見和子は、無着成恭編『山びこ学校』（青銅社、一九五二）などの生活綴方作品、後藤彦十郎編『魂あいふれて…二十四人の教師の記録』（百合出版、一九五二）、国分一太郎『新しい綴方教室』（日本評論社、一九五二）などの生活綴方実践記録を読むことによって、明治以後の日本のインテリが、日本を、また日本人を論じるにあたり、「自己をふくまざる集団」として、一段高いところから論じていたという、鶴見俊輔の指摘を、「わたし自身にはねかえるものとしてうけいれるようになった」（鶴見、一九九八a:三三三）という。

そして、一九五二年八月一日〜三日、岐阜県中津川市でひらかれた作文教育全国協議会に講師として参加し、生活綴方教育を実践している教師たちと交流した。そこには、澤井余志郎はじめ、東亜紡織泊工場で『私の家（ガリ版）』をつくったメンバー三名も参加していた。後に明らかにするように、この時点で鶴見和子はすでに、『私の家（ガリ版）』を手に入れ、読んでいたのであった。

協議会での出会いからひと月もたたない、同年八月二十三〜二十五日には、東亜紡織労働組合の幹部とともに東亜紡織泊工場を訪問し、講演だけでなく、女子工員たちと長時間にわたって座談している。学歴も、年齢も（当時鶴見は三四歳、女子工員らは十代）、生まれ育ちも、およそ共通するものない鶴見と東亜紡織の女子工員たちとは、初対面であるにもかかわらず、楽しく、熱く、深く交流したのであった。

女子工員たちに啓発された鶴見は、東京に帰るや、「生活をつづる

会」を始める。これは、「東京の労働者の家庭の主婦や、工場や会社で働く娘さんたちや、学校の先生や学生など、異なる生活経験をせおっている人たち―その大部分が婦人―が集って、わたしたちの日々のくらしのことや、身の上のことなどを、ありのままに、しゃべっているとおなじコトバで、考えあい、書きつづってゆく集り集り」〔鶴見、一九九八b:三二八〜三二九〕である。この生活をつづる会の成果として、鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』（毎日新聞社、一九五四）、生活をつづる会編『おおかさんと生活綴方』（百合出版、一九五七）、鶴見和子・牧瀬菊枝編『ひき裂かれて―母の戦争体験』（筑摩書房、一九五九）などが出版された。

泊工場の女性たちと鶴見和子は、その後も長く交流を続けた。澤井余志郎は、『記録集 第一巻 私の家・母の歴史』の序文「『書くこと』にこだわって」で、次のように書いている。

それにしてもこの五〇年という半世紀、「書くこと」にこだわ
り、成長してこられたのは、鶴見さんがいつも、直接に間接に、
はげまし導いてくださったおかげだと、感謝の気持ちでいっぱい
です〔澤井、二〇〇二:ノンブルなし〕。

3. 『私の家（ガリ版）』発見のプロセス

『私の家（ガリ版）』は、偶然に発見されたのではなく、以下に見るような根拠と推理にもとづいて、資料を搜索した結果であった。ここでは、その根拠と推理について述べたい。

『私の家（ガリ版）』は、生活綴方を書いた女子工員が自分で所有したり、工場内の同僚に配布したりするだけでなく、郷里の家族や、東亜紡織労働組合関係者、中学時代の先生、無着成恭、鈴木喜代春、清水幾太郎ら生活綴方運動の担い手のもとにも手渡されたり、送られたりした。『私の家（活版）』には、生活綴方だけでなく、こうして届いた『私の家（ガリ版）』の読者から寄せられた感想・批評が収録

されている。筆者ひとりひとりをとりあげた長文の批評もあれば、簡潔に謝辞を伝えるだけのものもある中に、以下のような文面の、全織同盟友愛編集部・にしむたしげをからの、七月十四日付書簡（文面から、はがきだったと思われる）がある。

前略「私の家」只今落手しました。

まだ読んでいませんがとてもよさそうな気がしますのでもし余分がありましたら、次のところにも送ってくださいませんか。

東京都世田ヶ谷区成城町六七八鶴見和子宛 なお鶴見さんはラジオで楠の竹の子会⁽⁴⁾を紹介した人です。右お願まで…（後略）「文教部編集班編、一九五二・一〇四」

河出新書版『母の歴史』には、これに対応する次のような鶴見の記述がある。

「紡績工場で『山びこ学校』をやっていますよ。」

二年前の夏、そのころ全せん⁽⁴⁾の「友愛」の編集をしておられたにしむた⁽⁴⁾・しげおさんが、そういつて私に紹介して下さったのが、東亜紡織の「楠の森」（楠工場）⁽⁵⁾と、「私の家」（泊工場）という、二つのガリ版の文集でした「鶴見、一九五四…一七九」。

また、澤井余志郎は、中津川市でひらかれた作文教育全国協議会での鶴見和子との出会いを、次のように書いている。

この協議会には、講師として鶴見和子さんがきておられ、立話ではあつたがはじめてお会いした。すでに『私の家』をお読みになつておられ、これからもがんばっていくように元気づけられ、なかまたちへいいおみやげができたところんだ「澤井、

一九五四・一四九」。

つまり、にしむたの依頼によつて、七月中には鶴見和子のもとに東亜紡泊工場から『私の家（ガリ版）』が届き、作文教育全国協議会に出席する以前に、鶴見はそれを読んでいたのである。

とするならば、ひよつとしたら、『私の家（ガリ版）』は鶴見和子が晩年まで所蔵していたかもしれない。そう考えて鶴見和子文庫にあつたところ、まさしく『私の家（ガリ版）』が発見されたのである⁽⁶⁾。

『私の家（ガリ版）』は、鶴見和子文庫未公開資料の「生活を記録する会⁽⁵⁾」と書かれた箱の中に入っていた。この箱の中身は、もともと「東亜紡（四日市 その一）」と書かれた封筒の中に入っていた資料を移したものである（写真1）。同じ封筒の中には、ほかに『たて糸よこ糸』、『なかまたち』などの文集、劇団三期会によつて上演された『明日を紡ぐ娘たち』台本、澤井余志郎の解雇無効確認等請求事件の記録などが一緒に入っていた。「東亜紡（四日市 その一）」の文字は、鶴見和子自身が書いたものとみられる。

なお、『私の家（活版）』は、鶴見和子文庫の中には所蔵されていないようである。



写真1. 『私の家（ガリ版）』が入っていた封筒

4. 『私の家（ガリ版）』の体裁

『私の家（ガリ版）』は、B4判わら半紙に印刷されたものを半分に折り（つまり、冊子としてはB5判）、ホッチキスで綴じて、製本されている。わら半紙はかなり酸化が進んでいる。

表表紙と裏表紙を別にする、本文は八二頁である。ただしノンブルは、「私の家」をテーマとした文集部分が七二頁まで通し番号となっているが、それに続く「夜」と題された創作からは、別にまたノンブルが一頁から始まっている（ノンブルが入っているのは八頁まで、最後の九頁目は欠落）。また、最後の頁の「◇ あとがきにかえて ◇」には、ノンブルが入っていない。

表表紙は、青と茶色のインクによる二色刷で、米俵か炭俵のようなものと農民たちの像の版画が描かれ、裏表紙は、茶色のインクのみを使用した、藁葺き屋根の民家の小さなスケッチである。

全体を見て、気づいたことをひとつ書いておきたい。『私の家（ガリ版）』六四頁（ただし、この頁にはノンブルが入っていない）に「労文山びこ学校とは？」という一頁のコラムがあり、その前後での綴方の雰囲気がちがう。たとえば、その前は、筆者名が文章の最後に（一）に入れて表記されているのに対し、その後は、タイトルのすぐ後に表記されている。ガリ版の文字もちがう。こうしたことから、先にいったん六四頁までを印刷し、後から（締め切り後？）出された二名（小林クニ子・金子栄子）の綴方を六五〜七二頁（ちょうどわら半紙四枚分）に追加した可能性が考えられる。

注

（1）生活綴方を学校児童・生徒の作文に限定し、学校外、とくに大人の作文は生活記録と呼んで区別することが多いが、ここでは、生活を具体的に見つめ、自分の言葉でつづる作文の総称として、「生活綴方」を使用する。

（2）『私の家（ガリ版）』出版当時、サークルはまだ、「生活を記録する会」とは名づけられていなかった。

（3）『私の家（活版）』は、日本図書センターより復刻されたものを参照したが、元の文集と復刻された記録集とでノンブルが二重になっている。引用にさいしては、元の文集のノンブルを提示した。

（4）「楠の子会」とは、同じ四日市市内にあった、東亜紡織楠工場のサークルのこと。なお、楠工場で教務係にいた訓覇也雄によれば、「竹の子会」はコーラス部の生活記録であり、一九五一年、婦人少年局が募集した、第一回働く年少者の生活記録に入選して、労働大臣賞を受賞した「訓覇、一九五六・一六五」。

（5）楠工場の文芸部は「丘の木会」と名づけられていた。一九五一年に「丘の木会」という生活記録の文芸部ができて文集「楠の

森、を二冊まで発行し」「訓覇、一九五六・一六四」たという。
 (6) 実際に『私の家(ガリ版)』を鶴見和子文庫の未公開資料の中から探し出したのは、人間学研究所事務員(当時)の立石尚史さんである。

参照文献

- 鶴飼正樹、二〇〇九「生活綴方からつながる世界」西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ』日本図書センター
 訓覇也雄、一九五六「ねこそぎの愛情」磯野誠一・木下順二・鶴見和子・日高六郎・丸岡秀子編『仲間の中の恋愛』河出新書
 澤井余志郎、一九五四「ノロノロと歩んできたなかまたち」『母の歴史』を書くまでのこと―木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出新書
 澤井余志郎、一九五六「紡績の娘から百姓娘へ」磯野誠一・木下順二・鶴見和子・日高六郎・丸岡秀子編『仲間の中の恋愛』河出新書
 澤井余志郎、一九九八「汚れた手拭いと「先生」」『コレクション 鶴見和子曼茶羅 II 人の巻―日本人のライフ・ヒストリー』月報7 藤原書店
 澤井余志郎、二〇〇二「書くこと」にこだわって(生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センター)
 澤井余志郎、二〇〇九「紡績工員の生活記録から公害の記録へ」西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ』日本図書センター
 志賀はるみ、一九五二a「文集作り」文教部編集班編『生活綴方 私の家』東亜紡織泊労働組合(生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センターに収録)

志賀はるみ、一九五二b「私の家」その後」文教部編集班編『生活綴方 私の家』東亜紡織泊労働組合(生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センターに収録)

生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センター

生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第7巻

紡ぎ・記録』日本図書センター

生活をつづる会、一九五七『おかあさんと生活綴方』百合出版

辻智子、二〇〇二a「解説」(生活を記録する会編、二〇〇二『紡績

女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センター)

辻智子、二〇〇二b「(資料)年譜」(生活を記録する会編、

二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第7巻 紡ぎ・記録』日本図書センター)

鶴見和子、一九五四a「母の歴史」をつくった人たち―集団の中の

人間の成長―木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出新書(鶴見和子『コレクション 鶴見和子曼茶羅 II 人の巻―日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店に収録)

鶴見和子、一九五四b「話しあい 書きあう仲間」鶴見和子編『エン

ピツをにぎる主婦』毎日新聞社(鶴見和子『コレクション 鶴見和子曼茶羅 II 人の巻―日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店

に収録)

鶴見和子、一九九八a「生活綴方教育にまなぶ」鶴見和子『コレク

ション 鶴見和子曼茶羅 II 人の巻―日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店(初出は『図書』一九五三年十月号)

鶴見和子、一九九八b「主婦と娘の生活記録」鶴見和子『コレクシ

ョン 鶴見和子曼茶羅 II 人の巻―日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店(初出は『岩波講座 文学四』岩波書店、一九五三)

藤原書店(初出は『岩波講座 文学四』岩波書店、一九五三)

- 鶴見和子、一九九八c「生活記録運動の意味―経験の発生の場へ―」
- 鶴見和子『コレクション 鶴見和子曼荼羅 II 人の巻―日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店（初出は『新日本文学』一九八五年十月号）
- 鶴見和子編、一九五四『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社
- 鶴見和子・牧瀬菊枝編、一九五九『ひき裂かれて』筑摩書房
- 西川祐子、二〇〇九『生活綴方』と『生活記録』の出会い―一九五二年八月、中津川』西川祐子・杉本星子編『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ』日本図書センター
- 原豊子、一九五四『このよいもの生活綴方』木下順二・鶴見和子編『母の歴史』河出新書
- 古川喜恵子、一九五二『鶴見さんを囲んで』『私のお母さん』東亜紡織労働組合婦人部（生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センターに収録）
- 文教部編集班編、一九五二『生活綴方 私の家』東亜紡織労働組合（生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センターに収録）
- 三輪泰史、二〇〇六『一九五〇年代のサークル運動と労働者意識―東亜紡織労働工場「生活を記録する会」にそくして―』広川禎秀・山田敬男『戦後社会運動史論―1950年代を中心に―』大月書店
- 労文文学サークル（つゞり方のなかま）、一九五二『私の家』を出発点として』文教部編集班編、一九五二『生活綴方 私の家』東亜紡織労働組合（生活を記録する会編、二〇〇二『紡績女子工員生活記録集 第1巻 私の家・母の歴史』日本図書センターに収録）

私の家



労文文学サークル編

「」の文集がでるまで

「興家はとうして楽しいか」これは四月十五日の山びこ学校でみんなが願に汗を浮かべて討論したことです。自分の家の争いをするのでよく話がはみみ、この討論をもつて発展させるために「みんなを説くべきはやはりか」と云う事になり、勞文生徒が一生懸命書き始めたのを、約二ヶ月かかってヤフと今日、ここに「」の文集がでるまでつたのだからこれまでもは予想もしてはなかつた色々ないざこざがありました。

「古川さん。今度は何んたの巻々。原稿出して」

古川「昔は争はさしたけだ出せばいい。恥かしくて」

「どんは系統の争いに出して」

古川「いや、どうして争いや。話えれば考える程いや。出せばいい」

「でもね。この争いもどんは争い人の感情で左右される問題じゃないと思うの。みんなのために」

「おぼろと認めて出して」

愚直「私の時日の原稿もうなれば百までヤフヤフた。私ね。昨日考えたんだけど本当はあの原稿」

「黙して居しなれ」

「でも半分使ったヤフヤフた」

尾崎「あつて書くのもいざと聞かんだけど、みんな取かしの家の争いみんなに知つておらつておるも」

「でもおぼろいんせやないか。他人の家の手紙を私達も動かせるものじゃないと思うの」

「今ね。原稿もどんはつたやつてどんね。おぼろいんせやないか。私達も動かせるものじゃないと思うの」

ね。眺かしいわ」

「見せたいわ。あつ。名前呼」

小林「名前書かんでいて、呼」

「でもね。みんなどうなつて眺かしかるのよ。ちやつぱり名前かいた方が責任がもて、いゝ

んじやないかしら」

小林「いやだわ。山びこ学校のみんな居戻した？、私、居戻した人しかこの文集見せたいよ

うにしたいわ」

原「私ね。誰か書くからね、絶対笑わせないで。みんなが笑うんだつたら私泣いちゃうわ。山びこ

学校の人は絶対真剣に考えなければ駄目だと思ふのよ」

「小袖さん、原様まだ？」

小袖「うん、やうやう三時までおきてたの。だれか書けなかつたわ」

「三時。」

小袖「うん。あのね。私本当の筆を書いているのよ。眺かしいけれどみんな書いてやうわ。書いてる

とわ、いやにはつてくるの。だれか何も思い筆したのだけはいと思つて」

六月二日の山びこ学校です。みんなの拍手にむかえられて、沢井さんが書きかけの綴方を読んでい

る。みんなしーんとほつて聞いている。

読み終ると同時に松井さんと加藤さんが「俺も書くかな。私の家」と声を上げた。みんな「うー」と

と歓声を上げた。そして二度目の拍手を送ったのだつた。

労文山びこ学校とは？

雪がコンコン降る。

人間は

その下を暮らしているのです。

これは悪着先生の山びこ学校の石井敏雄君が書いた詩です。この山びこ学校が、油工場の文化部に於て論壇に上かりはじめたのは昨年の十二月でした。

その当時から「観念的だナエッ」という言葉が流行しはじめ、みんなの間でよく使われましたが、観念的だナエと去うだけだすましてしまえば、反観念的じやないか、と去い出した人がいました。

「どうだ〜」と去う詠を悪着先生の山びこ学校のオ釘をもち、して、労文、文学サークルで「生活綴才研究会」を作ろうじやないかと去うのが、とも〜の山びこ学校の田本です。

大体の案がきよりみんなの前に示されたのは文学講座のオ一号であつたと思ひます。そしてオ一回の山びこ学校開校日は二月の十五日でした。毎月一日と十五日に今まで色々争を話し合つて来ました。

「私達は一切何のために書いたらい、のたろうかしから

始まつて江口江一君の「田の死とその後」をよみ合ひ、「あせ道教室」を勉強している中に、家の問題が出てきて現在の「農家はとうして食しいか」という争に陥つたわけだす。

山びこ学校の始めの目的は生活綴才研究会であつたのですが、だん〜発展してきてみんな同苦しいものゝななくなつて来ました。

みんながより集つて楽しく笑いながら、本当の争を話し合ひ社会の「更と発展の方向を見出す会」となつたのです。山びこ学校の中かに話し合つた後は、生徒達がそれぞれの方向ぞつがみ

「明日からやるぞ」

「うん、マラウな」

とはなすしあひながら大層なコーラスをして帰るのです。



◇ ぬくぬくにがえさ ◇

やつと今出来上りました。この文集を作るべくと云い出したのが四月十五日でしたから約二ヶ月かゝつたわけですね。よく読んで君たちの方の心からの叫びを汲み取りましよう。そして今度の山びこ学校ではこの文集を中心にして、討論会を開きまうとよく研究したいと思ひます。

この原稿を出すとき、みんなが恥かしかりました。ありのままの自分の家を発表するのがどうして恥かしいのさしよう。原因はなににあるのさしようか。まずこの争かり、みんなを論じあつて行きたいと思ひます。この文集の中にはその他色々な問題がこぼれてゐると思ひます。

尚この文集はこれだけにどまらずにしまわい。今後をこれにつゞきのを作りたいと思ひます。メ切まで間に合ひなかつた沢井さんや池田さんのもう一人もありますので、それを入れて、各方面の私の家に対する批判や山びこ学校の問題解決の記録を主にした「山びこ学校から何を學ぶか」的の文集を作らうじやないかといふ声をあかつて行なふ。今の中から、書き足りない差や感想を言ひて用意してゆきましよう。

原稿に名前を書いてない方がありましたか二つらうを調べて書いて行きました。誰もかじや毎のを代まんしてゐるのだと思つと、をうしてどくじなければならぬかたのです。思ひからが。

かりパン不存のため、発行がおくれ字も流みにくい所が初ると思ひますが、かりパンをきる同志が一人おちかえたと云う事で作かんべん願ひます。

(田中)

47

5

